

Amenable 位相群の表現について

鹿児島大学教養部 酒井幸吉

Amenable 局所コンパクト群 G はその多くの性質によって、
そうでない群と区別される。このことは G 上に Haar 測度が存
在することと、不変平均が存在することの重ね合せの結果と
して理解できる (F. P. Greenleaf [5], H. Reiter [9, ch. 8]). 一般
に位相群 G 上に不変平均の存在だけを仮定した場合はどうで
あろうか。たとえば次の結果は不変平均を用いて示される典
型的なものである (J. Dixmier [3], M. M. Day [2], M. Nakamura
and Z. Takeda [7]): "Amenable 群 G の Hilbert 空間 H 上 α -様
有界かつ強連続な表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(H)$ は unitary 表現に相似
になる。すなわち invertible, selfadjoint, positive な $B \in \mathcal{L}(H)$
が存在して $U_g \equiv B T_g B^{-1} (\forall g \in G)$ は unitary になる."

この報告では, amenable 群 G 上のベクトル値及び線形作用
値関数の不変平均に関する積分を考へ, G の線形表現のいく
つか特徴的な性質についてのべる。以下 G は常に位相群を表

ゆえ、文中で扱う位相線形空間は Hausdorff 的であり、その係数体は実又は複素数体であるとする。

§ 1 Amenable 群

$B(G)$ [$CB(G)$] は G 上の複素数値有界 [かゝ連続] な関数全体のつくる (Sup) ノルムに関する Banach 空間とする。 \mathcal{O} は $B(G)$ の実線形部分空間で次の (1.1)~(1.3) をみたすものとする:

$$(1.1) \quad \text{定数値関数 } I_G(g) = 1 \quad (g \in G) \text{ は } \mathcal{O} \text{ に属する,}$$

$$(1.2) \quad f \in \mathcal{O} \Rightarrow \bar{f} \in \mathcal{O}, \quad \text{ただし } \bar{f}(g) = \overline{f(g)} \text{ の共役複素数 } (g \in G),$$

$$(1.3) \quad f \in \mathcal{O}, s \in G \Rightarrow sf, f_s \in \mathcal{O}, \quad \text{ただし } sf(g) = f(sg), \\ f_s(g) = f(g_s) \quad (g \in G) \text{ とする.}$$

たとえば $CB(G)$ は (1.1)~(1.3) をみたしている。いま $\varphi \in \mathcal{O}^*$ が次の (1.4) (1.5) をみたすとき、 φ は \mathcal{O} 上の平均 といい:

$$(1.4) \quad \varphi \geq 0,$$

$$(1.5) \quad \|\varphi\| = \varphi(I_G) = 1.$$

平均 φ は次の性質をもつこと以上の (1.4), (1.5) より導かれる:

$$(1.6) \quad \varphi(\bar{f}) = \overline{\varphi(f)} \quad (\forall f \in \mathcal{O})$$

$$(1.7) \quad \inf \{f(g); g \in G\} \leq \varphi(f) \leq \sup \{f(g); g \in G\} \quad (\forall \text{ 実数値関数 } f \in \mathcal{O}).$$

いま $s_1, s_2, \dots, s_n \in G$ 及び $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n > 0, \sum_{i=1}^n \lambda_i = 1$ を与えて、 $\varphi = \sum_{i=1}^n \lambda_i \delta_{s_i}$ i.e., $\varphi(f) = \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i)$ ($f \in \mathcal{O}$) によって定まる平均を \mathcal{O} 上の有限平均 といい。 \mathcal{O} 上の平均及び有限平

均の全体をそれぞれ $M(\mathcal{O})$, $M_f(\mathcal{O})$ とかくことにする. $\forall s \in G$
 及び $\forall \varphi \in \mathcal{O}^*$ に対して, $s\varphi, \varphi s \in \mathcal{O}^*$ 且 $s\varphi(f) = \varphi(sf)$, $\varphi s(f) =$
 $\varphi(f_s)$ ($\forall f \in \mathcal{O}$) によって定義する. いま

$$\text{LIM}(\mathcal{O}) = \{ \varphi \in M(\mathcal{O}); s\varphi = \varphi (\forall s \in G) \}.$$

$$\text{RIM}(\mathcal{O}) = \{ \varphi \in M(\mathcal{O}); \varphi s = \varphi (\forall s \in G) \}$$

とおき, $\text{LIM}(\mathcal{O})$ [$\text{RIM}(\mathcal{O})$] の元 $\in \mathcal{O}$ 上の左[右]不変平均, 特
 に $\text{LIM}(\mathcal{O}) \cap \text{RIM}(\mathcal{O})$ の元 $\in \mathcal{O}$ 上の両不変平均という.

定義 1 $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$ [$\text{RIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$] のとき, \mathcal{O} は left
 [right] amenable であるという, 更に $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$ かつ $\text{RIM}(\mathcal{O})$
 $\neq \emptyset$ のとき \mathcal{O} は amenable であるという. 特に $\text{CB}(G)$ が ame-
 nable のとき, 位相群 G は amenable (A)群と略記) であるとい
 う.

注意. (1) \mathcal{O} が次の (1.8) を満たすとする:

$$(1.8) \quad f \in \mathcal{O} \Rightarrow \check{f} \in \mathcal{O}, \quad \text{ただし } \check{f}(g) = f(g^{-1}) \quad (g \in G).$$

このとき, $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset \Leftrightarrow \text{RIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$ であるから, \mathcal{O} が
 left 又は right amenable ならば, 自動的に \mathcal{O} は amenable にな
 る. $\text{CB}(G)$ は (1.8) を満たすから, $\text{LIM}(\text{CB}(G)) \neq \emptyset$ 又は RIM
 $(\text{CB}(G)) \neq \emptyset$ ならば, G は amenable になる.

(2) $\text{CB}(G)$ の代わりに $B(G)$ が amenable であるとき, G は
 amenable であると呼ばれることもある. このときは amenable
 群のクラスはややせまくなり, 位相群であることの意味がう

すらくこととなる。従ってこの報告では定義1のように amenable 群を定めることにする。】

(A)群の例 (1) コンパクト群, 可解群は(A)群である。特に可換群は(A)群である。

(2) G は局所コンパクトで, G_0 は G の単位元の連結成分, N は G_0 の最大連結可解正規部分群 (G_0 の根基) とする。いま G/G_0 はコンパクトであるとする。このとき G が (A)群であるための必要十分条件は G/N がコンパクトになることである (N. W. Rickert [10])。従って, 連結半単純群 (i.e. $N = \{\text{単位元}\}$) が amenable になるのはコンパクトのときにかぎる。

§2 バクトル値及び線形作用素値関数の平均に関する積分

V は局所凸位相線形空間 (LCTV空間と略記) とする。 ACT の convex hull 及びその closure を $Co(A)$ 及 $\overline{Co}(A)$ とかくことにする。写像 $f: G \ni g \rightarrow f(g) \in V$ で次の (2.1)(2.2) を満たすものの全体を $C(G, V)$ と表わす:

(2.1) $C(f) = \overline{Co}(f(g); g \in G)$ は弱コンパクト,

(2.2) $\forall \varepsilon \in V^*$ に対して, G 上の関数 $\langle f(g), \varepsilon \rangle$ は連続。

また $M(CB(G)), M_f(CB(G))$ を簡単のためそれぞれ $M(G), M_f(G)$ とかくことにする。

補題1 $f \in C(G, V)$ とする。 $\forall \varphi \in M(G)$ に対して, $\varphi(f) \in C(f)$ で (2.3) を満たすものが一意的に存在する。

$$(2.3) \quad \langle \varphi(f), z \rangle = \varphi(\langle f(g), z \rangle) \quad (\forall z \in V^*).$$

この $\varphi(f)$ を f の φ に關する積分と云う。

証明 $\varphi(f)$ の一意性は (2.3) より明らかだから、その存在を云えばよい。まず $\varphi \in M_+(G)$ で $\varphi = \sum_{i=1}^n \lambda_i \delta_{s_i}$ ($\lambda_i > 0, s_i \in G$ ($i=1, 2, \dots, n$) で $\sum_{i=1}^n \lambda_i = 1$) とする。 $\forall z \in V^*$ に対して

$$\varphi(\langle f(g), z \rangle) = \sum_{i=1}^n \lambda_i \langle f(s_i), z \rangle = \langle \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i), z \rangle$$

であるから $\varphi(f) = \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i) \in C(f)$ とすればよい。次に $\varphi \in M(G)$ とする。 $M_+(G)$ は $M(G)$ の中で w^* -dense だから $\varphi = w^*\text{-}\lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}$ なるネット $\{\varphi_{\alpha}\} \subset M_+(G)$ が存在する。上で述べたとより、各 φ_{α} に対して (2.3) をみたす $\varphi_{\alpha}(f) \in C(f)$ が対応する。いま $C(f)$ は弱コンパクトだから $\{\varphi_{\alpha}(f)\}$ の部分ネット $\{\varphi_{\beta}(f)\}$ である実 $f_0 \in C(f)$ に弱収束するものがある。このとき、 $\forall z \in V^*$ に対して

$$\begin{aligned} \langle f_0, z \rangle &= \lim_{\beta} \langle \varphi_{\beta}(f), z \rangle = \lim_{\beta} \varphi_{\beta}(\langle f(g), z \rangle) \\ &= \lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}(\langle f(g), z \rangle) = \varphi(\langle f(g), z \rangle). \end{aligned}$$

従って $\varphi(f) = f_0$ とすればよく、 $\varphi(f) = w\text{-}\lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}(f)$ である。 QED.

V_1, V_2 は LCTV 空間とし、 V_1 から V_2 への連続線形写像の全体を $\mathcal{L}(V_1, V_2)$ とする。 $ACL(V_1, V_2)$ に対して $Co(A)$ の weak operator 位相に關する closure を $wop\text{-}\overline{Co}(A)$ とかく。写像 $T: G \ni g \rightarrow T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ は弱連続 i.e.,

$$(2.4) \quad \forall v \in V_1, \forall z \in V_2^* \text{ に対して, } G \ni g \mapsto \langle T_g v, z \rangle \text{ は連続,}$$

であり、更に weakly almost periodic (wap と略記) i.e.,

(2.5) $\forall v \in V_1$ に対して $\overline{C_0}(T_g v; g \in G)$ は弱コンパクトであるとする。このとき, $\forall v \in V_1$ に対して写像 $G \ni g \mapsto T_g v \in V_2$ は $C(G, V_2)$ に属するから, この補題 1 に適用すると次の補題が従う。

補題 2 写像 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ は弱連続かつ wap であるとする。 $\forall \varphi \in M(G)$ に対して, V_1 から V_2 への線形写像 $\varphi(T)$ 及びネット $\{T_\alpha\} \subset C_0(T_g; g \in G)$ が存在し次の (2.6), (2.7) が成立する:

$$(2.6) \quad \langle \varphi(T)v, z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall v \in V_1, \forall z \in V_2^*),$$

$$(2.7) \quad \varphi(T)v = w\text{-}\lim_\alpha T_\alpha v \in \overline{C_0}(T_g v; g \in G) \quad (\forall v \in V_1).$$

この $\varphi(T)$ は一意的であり, T の φ に関する積分 とする。

補題 3 写像 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ は弱連続, wap かつ $\{T_g; g \in G\}$ は同等連続であるとする。このとき $\varphi \in M(G)$ に関する T の積分 $\varphi(T)$ は連続写像になり $wop\text{-}\overline{C_0}(T_g; g \in G)$ に属する。

証明 $\mathcal{N}_1, \mathcal{N}_2$ はそれぞれ V_1, V_2 の原点における基本凸近傍系とする。 $\forall \Pi_2 \in \mathcal{N}_2$ に対して, $W_2 \in \mathcal{N}_2$ 及び $\Pi_1 \in \mathcal{N}_1, \varepsilon W_2 + W_2 \subseteq \Pi_2, T_g(\Pi_1) \subseteq W_2$ ($\forall g \in G$) なるように之ら選ぶことができる。このとき $T_0(\Pi_1) \subseteq W_2$ ($\forall T_0 \in C_0(T_g; g \in G)$) になる。 $v \in \Pi_1$ とすると, $\varphi(T)v \in \overline{C_0}(T_g v; g \in G)$ 故に, $T_0 \in C_0(T_g; g \in G)$ で $\varphi(T)v - T_0 v \in W_2$ なるものが存在する。従って,

$$\varphi(T)v = (\varphi(T)v - T_0 v) + T_0 v \in W_2 + W_2 \subseteq \Pi_2$$

故に $\varphi(T)(\Pi_1) \subseteq \Pi_2$ となり, (2.7) より $\varphi(T) \in \text{wop-}\bar{C}_0(T_g; g \in G)$. QED.

いま写像 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ が 一様有界 であるとは, V_1, V_2 が Banach 空間であり, $\text{Sup} \{ \|T_g\|; g \in G \} < \infty$ のときをいう. このとき $\{T_g; g \in G\}$ は同等連続だから補題 2, 3 より次の補題を与える.

補題 4 写像 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ は弱連続, wop から一様有界であるか, V_1, V_2 が Hilbert 空間で T は弱連続から一様有界であるとする. このとき $\varphi \in M(G)$ に関する T の積分 $\varphi(T)$ は $\text{wop-}\bar{C}_0(T_g; g \in G)$ に属し, $\|\varphi(T)\| \leq \text{Sup} \{ \|T_g\|; g \in G \}$ を満たす.

補題 5 写像 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$ は弱連続から一様有界であるとする. このとき $\forall \varphi \in M(G)$ に対して, $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V_2^*, V_1^*)$ で次の (2.8), (2.9) を満たすものが一意的に存在する:

$$(2.8) \quad \langle v, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall v \in V_1, \forall z \in V_2^*),$$

$$(2.9) \quad \|\varphi(T^*)\| \leq \text{Sup} \{ \|T_g\|; g \in G \}.$$

証明 $\forall z \in V_2^*$ に対して, $\text{w}^*\text{-}\bar{C}_0(T_g^* z; g \in G) \subset V_1^*$ は W^* -コンパクトだから, 写像 $G \ni g \mapsto T_g^* z \in V_1^*$ に補題 1 を適用すると, (2.8) を満たす $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V_2^*, V_1^*)$ が一意的に定まる. 更に (2.8), (1.5) より $\varphi(T^*)$ は (2.9) を満たしている. QED.

以下 $CB(G)$ 上の左又は右不変平均に関する G 上のベクトル値又は線形作用素値関数の積分を考へることによつて導かれるいくつかの結果をのべる.

§3 Amenable群の Cohomology

V は LCTV 空間とする. G の V 上 λ の表現 $T: G \ni g \rightarrow T_g \in \mathcal{L}(V) = \mathcal{L}(V, V)$ は弱連続かつ WAP であるとする. $Z(G, T, V)$ は $f \in C(G, V)$ ((2.1), (2.2) 参照) で

$$(3.1) \quad f(sg) = T_s f(g) + f(s) \quad (\forall s, g \in G)$$

をみたすものの全体とする. $v \in V$ に対して $\partial v \in C(G, V)$ を $\partial v(g) = T_g v - v$ ($g \in G$) によって定めると, $\partial v \in Z(G, T, V)$ となり, 写像 $\partial: V \ni v \rightarrow \partial v \in Z(G, T, V)$ が定義される.

定理1 (A)群 G の表現 $T: G \ni g \rightarrow T_g \in \mathcal{L}(V)$ は弱連続かつ WAP であるとする. このとき $\forall f \in Z(G, T, V)$ に対して, $v \in C(f) = \overline{\text{co}}(f(g); g \in G)$ が存在して $f = -\partial v$ となる. 従って写像 $\partial: V \rightarrow Z'(G, T, V)$ は surjective である.

証明 $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$ とする. $f \in Z(G, T, V)$ とし, f の φ に関する積分 $v \in C(f)$ とすると, $\forall s \in G, \forall z \in V^*$ に対して, (2.3), (3.1), (1.5) 及び φ の左不変性より

$$\begin{aligned} \langle -\partial v(s), z \rangle &= \langle v - T_s v, z \rangle = \langle v, z - T_s^* z \rangle \\ &= \int_g \langle f(g), z - T_s^* z \rangle = \int_g \langle f(g) - T_s f(g), z \rangle \\ &= \int_g \langle f(g) - f(sg) + f(s), z \rangle = \langle f(s), z \rangle. \end{aligned}$$

よって $f = -\partial v$ である.

QED.

注意 A. Guichardet [6] はコンパクト群の unitary 表現に対して定理1が成立することを示し, 更に (A)群の unitary 表現に

ついても同様であることを注意しておく。一方任意の位相群 G に対して、その弱連続、wap から同等連続な表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ に対応する写像 $\partial: V \ni v \mapsto \partial v \in \Sigma(G, T, V)$ は surjective になる (酒井 [12])。これは G 上の弱概周期関数の全体 $WAP(G)$ が amenable であること (R. B. Burckel [1]) 及び $w, \forall z \in V^*, \forall f \in \Sigma(G, T, V)$ に対して、 $\langle f(g), z \rangle \in WAP(G)$ になることからわかる。

G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ は wap から次の (3.2) を満たすとする:

(3.2) $G \times V \ni (g, v) \mapsto T_g v \in V$ は連続。

このとき Cochain 複体 $\{C^n(G, T, V), \partial^n\}_{n=0,1,\dots}$ を次のように定める: $C^0(G, T, V) = V$ とし、 $n \geq 1$ のとき $C^n(G, T, V)$ は写像 $f: G^n = \underbrace{G \times G \times \dots \times G}_{n \text{ 個}} \rightarrow V$ で次の (3.3), (3.4) を満たすもの全体のなす線形空間とする。

(3.3) $\overline{C_0}(T_g f(g_1, \dots, g_n); g, g_1, \dots, g_n \in G)$ は弱コンパクト,

(3.4) $\forall \varepsilon > 0, \forall z \in V^*, 1 \leq k \leq n$ 及び $w, g_1, \dots, g_{k-1} \in G$ に対して、

G の単位元の近傍 W が存在して

$$\sup_{s \in W, h_k, \dots, h_n \in G} |\langle f(g_1, \dots, g_{k-1}, s, h_k, h_{k+1}, \dots, h_n), z \rangle - \langle f(g_1, \dots, g_{k-1}, h_k, \dots, h_n), z \rangle| < \varepsilon$$

となる。

一方線形写像 $\partial^n: C^n(G, T, V) \ni f \mapsto \partial^n f \in C^{n+1}(G, T, V)$ は

$$(3.5) \quad \partial^n f(g_1, \dots, g_{n+1}) = T_{g_1} f(g_2, \dots, g_{n+1}) +$$

$$+ \sum_{i=1}^n (-1)^i f(g_1, \dots, g_{i-1}, g_i g_{i+1}, g_{i+2}, \dots, g_{n+1}) + (-1)^{n+1} f(g_1, \dots, g_n)$$

によつて定まる. T が Wap かつ (3.2) を満たすことより $\partial^n f \in C^{n+1}(G, T, V)$ であることがわかる. また代数的計算によつて $\partial^{n+1} \cdot \partial^n = 0$ ($n \geq 0$) が成り立つ. 従つて

$$Z^n(G, T, V) = \text{Ker } \partial^n, \quad B^n(G, T, V) = \text{Im } \partial^{n-1} \quad (n \geq 1)$$

とよくと, $B^n(G, T, V) \subseteq Z^n(G, T, V)$ であり, $H^n(G, T, V) \cong Z^n(G, T, V) / B^n(G, T, V)$ ($n \geq 1$) とよく.

定理 2 (A)群 G が Wap かつ (3.2) を満たす表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ に對して, $H^n(G, T, V) = \{0\}$ ($n \geq 1$) である.

証明 $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$, $f \in Z^n(G, T, V)$ とする. $g_1, \dots, g_{n+1} \in G$ に對して, $\tilde{f}(g_1, \dots, g_{n+1}) \in V$ は $f(g_1, \dots, g_{n+1}, h) \in h \in G$ の関数とみなして φ に関する積分値とする. $\therefore \varphi$ と $\tilde{f} \in C^{n+1}(G, T, V)$ であることは容易に検証できる. (3.5), $\partial^n f = 0$ 及 φ の左不変性に注意して $\partial^{n+1} \tilde{f}$ を計算すると, $\forall z \in V^*$ に對して

$$\begin{aligned} \langle \partial^{n+1} \tilde{f}(g_1, \dots, g_{n+1}), z \rangle &= \varphi_h(\langle T_{g_1} f(g_2, \dots, g_{n+1}, h), z \rangle) + \\ &+ \sum_{i=1}^n (-1)^i \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{i-1}, g_i g_{i+1}, g_{i+2}, \dots, g_{n+1}, h), z \rangle) \\ &+ (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n+1}, h), z \rangle) \\ &= (-1)^{n+1} \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n+1}, g_n h), z \rangle) + (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n+1}, g_n), z \rangle) \\ &+ (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n+1}, h), z \rangle) \\ &= (-1)^n \langle f(g_1, \dots, g_n), z \rangle \end{aligned}$$

$$\therefore f = (-1)^n \partial^{n-1} \tilde{f} \quad \therefore H^n(G, T, V) = \{0\}. \quad \text{Q.E.D.}$$

§4 性質 P

G の Hilbert 空間 \mathfrak{H}_i 上への連続な unitary 表現 $T^i: G \ni g \mapsto T_g^i \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_i)$ ($i=1, 2$) に対して, T^1 と T^2 に関する intertwining 作用素の全体を $I(T^1, T^2)$ とする. すなわち $I(T^1, T^2) = \{ B \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2); BT_g^1 = T_g^2 B \ (\forall g \in G) \}$ とする. また \mathfrak{H}_1 から \mathfrak{H}_2 への Hilbert-Schmidt 線形作用素の全体を $HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ とし, $A \in HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ の Hilbert-Schmidt ノルムを $\|A\|$ で表わす.

定理 3 $T^i: G \ni g \mapsto T_g^i \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_i)$ ($i=1, 2$) は (A) 群 G の Hilbert 空間 \mathfrak{H}_i 上への連続な unitary 表現とする. このとき $\mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ 上の線形写像 P で次の性質 (4.1) ~ (4.4) を満たすものが存在する: $\forall A \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ に対して

$$(4.1) \quad P(A) \in \omega_{\text{op}}\text{-}\bar{C}_0(T_g^2 A T_{g^{-1}}^1; g \in G), \quad \|P(A)\| \leq \|A\|,$$

$$(4.2) \quad P(A) \in I(T^1, T^2), \quad P(P(A)) = P(A),$$

$$(4.3) \quad P(B_2 A B_1) = B_2 P(A) B_1 \quad (\forall B_i \in I(T^i, T^i) \ (i=1, 2)),$$

$$(4.4) \quad A \in HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2) \Rightarrow P(A) \in HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2), \quad \|P(A)\| \leq \|A\|.$$

証明 $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$, $A \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ とする. 補題 4 より, 写像 $G \ni g \mapsto T_g^2 A T_{g^{-1}}^1 \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ の φ に関する積分を $P(A)$ とすると, (4.1) を満たし, 次の (4.5) が成立する:

$$(4.5) \quad \langle P(A)v, x \rangle = \varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}^1 v, x \rangle) \quad (\forall v \in \mathfrak{H}_1, \forall x \in \mathfrak{H}_2).$$

従って $A \mapsto P(A)$ は線形であり, 上記を求めるものである. 実際 $\forall s \in G$ に対して, (4.5) と φ の左不変性より

$$\begin{aligned}
\langle T_S^2 P(A)u, z \rangle &= \langle P(A)u, \quad \rangle = \varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u, T_S^{-2} z \rangle) \\
&= \varphi(\langle T_{Sg}^2 A T_{g^{-1}}' u, z \rangle) \\
&= \varphi(\langle T_{Sg}^2 A T_{(Sg)^{-1}}' \cdot T_S^{-1} u, z \rangle) \\
&= \langle P(A) T_S^{-1} u, z \rangle \quad (\forall u \in \mathfrak{H}_1, \forall z \in \mathfrak{H}_2).
\end{aligned}$$

故に $P(A) \in I(T^1, T^2)$ である. $B \in I(T^1, T^2)$ のときは (4.1) より $P(B) = B$ になる: よより, $P(P(A)) = P(A)$ である. よって (4.2) が成立する. (4.3) も (4.5) より明らかである. 最後に (4.4) を示そう. $A \in HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ とし, $\{u_i; i \in I\}, \{z_j; j \in J\}$ はそれぞれ $\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2$ の完全正規直交系とする. $I_0, J_0 \in I, J$ の任意の有限部分集合とする. このとき

$$\begin{aligned}
\sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\langle P(A)u_i, z_j \rangle|^2 &= \sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle)|^2 \\
&\leq \sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} \varphi(|\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle|^2) \\
&= \varphi\left(\sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle|^2\right) \leq \|A\|^2
\end{aligned}$$

故に $\|P(A)\| \leq \|A\|$ であり, $P(A) \in HS(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ である. QED.

注意 (1) (A)群 G に対して, $LIM(CB(G))$ 及び u - $RIM(CB(G))$ は一般に多の元を含む. u を $f \in CB(G)$ に対して, 定数 α が存在して, $\varphi(f) = \alpha$ ($\forall \varphi \in LIM(CB(G)) \cup u$ - $RIM(CB(G))$) であるとき, f は α に almost convergent であるといふ, $\alpha \in m(f)$ と表わすことにする. $\psi \in u$ - $RIM(CB(G))$ とし, 定理 3 の記号の下に, $A \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ に対して $Q(A) \in \mathcal{L}(\mathfrak{H}_1, \mathfrak{H}_2)$ と

$$(4.6) \quad \langle Q(A)u, z \rangle = \psi(\langle T_g^{-1} A T_g' u, z \rangle) \quad (\forall u \in \mathfrak{H}_1, \forall z \in \mathfrak{H}_2)$$

によつて定めると $Q(A) \in I(T^1, T^2)$ になる. かつ T^1 と T^2 は disjoint i.e. $I(T^1, T^2) = \{0\}$ であるとき, 行列要素系 $\{\langle T_g^1 v_1, v_2 \rangle; v_i \in \mathcal{H}_i, (i=1,2)\}$ 及 $w = \{\langle T_g^2 z_1, z_2 \rangle; z_i \in \mathcal{H}_i, (i=1,2)\}$ に対して次の直交関係が成立する:

$$(4.7) \quad m(\langle T_g^1 v_1, v_2 \rangle, \overline{\langle T_g^2 z_1, z_2 \rangle}) = 0.$$

これは (4.5), (4.6) にて A として $\lambda = \lambda \perp$ のものを代入し, $P(A) = Q(A) = 0$ なることよりえられる.

(2) G が (A) 群でなくても, 定理3の記号の下で次のこと成立する (酒井 [12]): " $\forall A \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$ に対して $HS-\bar{C}_0(T_g^1; g \in G) \cap I(T^1, T^2)$ は一真 $P(A)$ になり, 写像 $A \rightarrow P(A)$ は線形である. ここで $HS-\bar{C}_0(B)$ は $C_0(B) \subset HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$ の Hilbert-Schmidt ノルムに関する closure である."

かつ Hilbert 空間 \mathcal{H} 上の von Neumann 作用素代数 \mathcal{O} にて, \mathcal{O} に属する unitary 作用素の全体を \mathcal{O}^u , \mathcal{O} の commutant を \mathcal{O}' とする.

定義 2 \mathcal{O} の性質 P をもつとは, $\forall A \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$ に対して, $wop-\bar{C}_0(\cup A \cup A^*; A \in \mathcal{O}^u)$ が \mathcal{O}' と共通真をもつときをいう.

(J. Schwartz [14] による).

G の unitary 表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$ に対して, $\{T_g; g \in G\}$ によつて生成される von Neumann 作用素代数を $\mathcal{O}(T)$ とかくことにすると,

$$(4.9) \quad \mathcal{O}(T) = \{T_g; g \in G\}'' , \quad \mathcal{O}(T)' = I(T, T), \quad \{T_g; g \in G\} \subseteq \mathcal{O}(T)^u$$

である。

定理 4 (A)群 G の連続な unitary 表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_g)$ に対して, $\mathcal{O}(T)$ は性質 P をもつ。

証明 定理 3 より, $\mathcal{L}(\mathcal{H}_g)$ 上の線形写像 P で, $\forall A \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_g)$ に対して, $P(A) \in \text{wop-}\overline{\text{Co}}(T_g A T_g^{-1}; g \in G) \cap \mathcal{I}(T, T)$ なるものが存在する。従って (4.9) より

$$P(A) \in \text{wop-}\overline{\text{Co}}(\cup A \cup A^*; \cup \mathcal{O}(T)^{\cup}) \cap \mathcal{O}(T)'$$

となり, $\mathcal{O}(T)$ は性質 P をもつ。

QED.

注意 デスクリット群 G が (A)群であるための条件は G の左正則表現によって生成される von Neumann 作用素代数の性質 P をもつことである。これは S. Sakai [13, p. 210] で示されている。

§5 Glicksberg-Reiter の等式及 u invariant extension property

§§ 3, 4 の結果はいつでも $CB(G)$ 上の左不変平均に関する積分を考へることによつて之らから得られるのである。この § では $CB(G)$ 上の右不変平均の応用例を紹介する。以下この § では V は Banach 空間で, G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ は弱連続かつ

$$(5.1) \quad \text{Sup} \{ \|T_g\|; g \in G \} \leq 1$$

をみたすものとする。この様な表現 T に対して, $\{T_g v - v; g \in G, v \in V\}$ より生成される V の閉線形部分空間を $H(T, V)$, $\forall v \in V$

に対して, $C_G(v) \equiv \overline{C_0(T_g v; g \in G)}$ とおく. このとき $\forall v \in V$ に対して $C_0(T_g v; g \in G) \subseteq v + H(T, V)$ であるから, 次の不等式 (5.2) が成立する:

$$(5.2) \quad d(v, H(T, V)) \leq d(0, C_G(v)) \quad (\forall v \in V).$$

ここで d は V の ノルム によつて定義される距離である.

定義 3 G の表現 T に対して, 次の等式 (Glicksberg-Reiter の等式):

$$(5.3) \quad d(v, H(T, V)) = d(0, C_G(v)) \quad (v \in V)$$

が成立するとき, 表現 T は性質 (GR) をもつという.

定理 5 (Glicksberg [4], Reiter [8]) A 群 G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ は性質 (GR) をもつ.

証明 (5.2) より (5.3) にて " \geq " が成立することを示さねばよい. 更に $v \in V$ に対して, $d_0 \equiv d(0, C_G(v)) > 0$ の場合に限つてよい. このとき $z_0 \in V^*$ で

$$(5.4) \quad \operatorname{Re} \langle f, z_0 \rangle \geq 1 \quad (\forall f \in C_G(v)), \quad \|z_0\| = 1/d_0$$

なるものが存在する. (H. Reiter [8, Lemma A]). 一方 $\varphi \in \operatorname{RIM}(CB(G))$ とすると, 補題 5 より, $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V^*)$ で

$$(5.5) \quad \langle v, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall (v, z) \in V \times V^*), \quad \|\varphi(T^*)\| \leq 1$$

なるものが存在する. φ の右不変性より, $\forall (f, z) \in V \times V^*$ 及 $u \in V$ $\forall s \in G$ に対して

$$\langle T_s f - f, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi_g(\langle T_g s f - T_g f, z \rangle) = 0.$$

従って $\langle R, \varphi(T^*)z \rangle = 0 \quad (\forall R \in H(T, V), \forall z \in V^*)$. $\therefore a:$

と (5.4), (5.5), (1.6) より, $\forall R \in H(T, V)$ に対し

$$\begin{aligned} \|v - R\| &\geq d_0 |\langle v - R, \varphi(T^*)z_0 \rangle| = d_0 |\langle v, \varphi(T^*)z_0 \rangle| \\ &\geq d_0 \operatorname{Re} \langle v, \varphi(T^*)z_0 \rangle = d_0 \operatorname{Re} \varphi(\langle T_g v, z_0 \rangle) \\ &= d_0 \varphi(\operatorname{Re} \langle T_g v, z_0 \rangle) \geq d_0 \end{aligned}$$

故に $d(v, H(T, V)) = \inf \{ \|v - R\|; R \in H(T, V) \} \geq d_0 = d(0, C_G(v))$. QED.

いま G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ に対して, W は V の閉線形部分空間で $T_g(W) \subseteq W \quad (\forall g \in G)$ なるものとし, $z_0 \in W^*$ は $\langle T_g f, z_0 \rangle = \langle f, z_0 \rangle \quad (\forall g \in G, \forall f \in W)$ なるものとする. $\therefore a$ と $\{W, z_0\}$ を 表現 T の不変系 とし $\therefore b$ とにする.

定義 4 G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ の任意の不変系 $\{W, z_0\}$ に対して, $z \in V^*$ で

$$(5.6) \quad \langle T_g v, z \rangle = \langle v, z \rangle \quad (\forall g \in G, \forall v \in V)$$

$$(5.7) \quad z|_W = z_0, \quad \|z\| = \|z_0\|$$

なるものが存在するとき, 表現 T は *invariant extension property* ((IEP) と略記) とも $\therefore b$ としう.

定理 6 (A) 群 G の表現 $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$ は (IEP) と $\therefore b$.

証明 $\{W, z_0\}$ は表現 T の不変系とすると, Hahn-Banach の定理より $z \in V^*$ で $z|_W = z_0, \|z\| = \|z_0\|$ なるものが存在する. $\therefore b$ かつ $\varphi \in \operatorname{RIM}(CB(G))$ とし, $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V^*)$ は (5.5) で与えられるものとする. $\therefore a$ と $z = \varphi(T^*)z \in V^*$ が求める z_0

の拡張になっている。実際 $\forall s \in G$ 及 $w \in W$ $\forall f \in V$ に対して

$$\langle T_s f, z \rangle = \varphi_g(\langle T_{gs} f, \tilde{z} \rangle) = \varphi_g(\langle T_g f, \tilde{z} \rangle) = \langle f, z \rangle$$

だから z は (5.6) をみたす。また $f \in W$ とすると

$$\begin{aligned} \langle f, z \rangle &= \varphi(\langle T_g f, \tilde{z} \rangle) = \varphi(\langle T_g f, z_0 \rangle) = \varphi(\langle f, z_0 \rangle) \\ &= \langle f, z_0 \rangle \end{aligned}$$

より $z|_W = z_0$ である。更に $\|z_0\| \leq \|z\| = \|\varphi(T^*)\tilde{z}\| \leq \|\tilde{z}\| = \|z_0\|$

より $\|z\| = \|z_0\|$ となり (5.7) が成立する。 QED.

注意 R.J. Silverman [15] は, $B(G)$ が amenable になる群について, 定理 6 よりもより一般的な invariant extension property を論じている。

おわりに

この報告では $CB(G)$ が amenable になる場合, G の線形表現のもつ特徴的な性質を論じてきたが, 一般に $B(G)$ の (1.1) ~ (1.3) をみたす内線形部分空間 Ω が left or right amenable になっているとき, Ω 上の左又は右不変平均に関する積分を考へることにより §3 ~ §5 と類似の議論を展開することが出来る (酒井 [11]). 更にこの理論と $WAP(G)$ がいっしょに amenable になることを結合すると任意の位相群 G のある種の線形表現に対して成立するいくつかの性質が導かれる (酒井 [12]).

References

- [1] Burckel, R.B.: Weakly almost periodic functions on semigroups, Gordon and Breach, New York, (1970).
- [2] Day, M.M.: Means for the bounded functions and ergodicity of the bounded representations of semigroups, Trans. Amer. Math. Soc., 69(1950), 276-291.
- [3] Dixmier, J.: Les moyennes invariantes dans les semigroupes et leur applications, Acta Sci. Math. (Szeged), 12(1950), 213-227.
- [4] Glickesberg, J.: On convex hulls of translates, Pacific J. Math., 13(1963), 97-113.
- [5] Greenleaf, F.P.: Invariant means on topological groups, Van Nostrand, New York, (1969).
- [6] Guichardet, A.: Sur la cohomologie des groupes topologiques, Bul. Sci. Math., 95(1971), 161-176.
- [7] Nakamura, M. and Z. Takeda, : Group representation and Banach Limit, Tôhoku Math. J., 3(1951), 132-135.
- [8] Reiter, H.: On some properties of locally compact groups, Indag. Math., 27(1965), 697-701.
- [9] _____: Classical harmonic analysis and locally compact groups, Oxford Mathematical monographs, (1968).
- [10] Rickert, N.W.: Some properties of locally compact groups, J. Austral. Math. Soc., 7(1967), 433-454.
- [11] Sakai, K.: On linear representations of amenable groups, (to appear in Science Report of Kagoshima Univ. 25(1976)).
- [12] _____: Applications of the invariant mean on $WAP(G)$, (to appear).
- [13] Sakai, S.: C^* -algebras and W^* -algebras, Springer, (1971).

- [14] Schwartz, J.: Two finite, non-hyperfinite, non-isomorphic factors, *Comm. Pure Appl. Math.*, 16(1963), 19-26.
- [15] Silverman, R.J.: Means on semigroups and the Hahn-Banach extension property, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 83(1956), 222-237.